

世に満ちる奇妙不可思議を愛好し、健康指標から眼を反らして旧型酒に酔っぱらう、ろくでなし達が集まる店。バー・オールドアダム。秘封倶楽部の活動の一環で訪れて以来、すっかり常連になってしまったその店で、私達はささやかな週末の一時を楽しんでいた。

「乾杯ー!」

「かんぱーい」

開けたばかりのフォビドゥンサイダーのグラスを重ね、くいと傾ければ喉に弾ける禁忌の炭酸。冷えた旧型^{オールド}なアルコールの野趣な味わいに思わず頬も綻ぶ。

専任の教授が課した面倒くさい課題を研究室の机に叩き込み、やっと迎えた週末。気分も踊ろうというものだ。しゅわしゅわと弾ける炭酸に包まれ、解放感がグラスの上に溢れ出す。

「二週間ぶりのお酒はたまらないわねえ。やっぱりこういう時は旧型酒に限るわ」

「蓮子がもつと計画的だったら、ここまで追い詰められる事もなかったと思うんだけど」

「あはは、でもそれじゃこの解放感も味わえなかったわよ。Dr. レイテンシー?」

「詭弁ねえ……」

口を尖らせる相棒に、ね？ とウインクひとつ。早速空になったグラスに、メリー、自分の順でサイダーを注ぐ。禁断の知恵がもたらすアルコールは、塩と油分の塊みたいなフィッシュアンドチップスと相性抜群だ。読めない文字を印刷された包み紙の新聞に指先を拭う。

「それでね、次の本の話なんだけど」

「あら、蓮子にはもう何かプランがあるの？」

今日の話題は、燕石博物誌の続刊となる予定の同人誌だ。オールドアダムの常連たちを通じて新しく得た不思議の糸口は、私達に新しい不思議との遭遇を与えてくれた。それをまとめて次の本にしようという計画である。幸い、燕石博物誌はそこそこ好評で、頒布時にも知り合いになったサークルと一緒に次のイベントにも参加を決めてある。

「ちよつと試してみたい装丁もあるのよ。今度は私も何か書いてみようかなって」

「今度は蓮子もペンネームを考えないといけないわね」

既に頭の中にはいくつかプロットもできている。課題とかで追い詰められている時は、まったくこういうアイディアばかり浮かぶものなのだ。

テーブルの上にタブレットを広げ、新しいサイダーの瓶と一緒にまだ見ぬ新刊にあれこれと想像を巡らせていた時。

カラン、と入口のベルが鳴る。珍しい。この時間にはあまり来客もないはずなのに。

3 オールドアダムパラドックス

ふと、メリーの肩越しにそちらを見上げた私は、そのままの姿勢でしばし絶句。

「どうしたの？ 蓮……」

間拔けな私の顔を覗き込んで、背後を振り返ったメリーも目を丸くする。

滅多に新顔の現れないオールドアダムでは、だいたいの来客は顔見知りだ。5回も来店すればだいたいの常連の顔は覚えてしまう。けれど、今日入り口をくぐってやってきたのは、あまりにも予想外で、実に見覚えのある二人組であったからだ。

「な、なにこれ!？」

「……どうということ？」

黒い帽子にケープ、ブラウスにスカートの宇佐見蓮子。金髪にモブキャップ、紫のブラウスのマエリベリー・ハーン。

そしてまた、なんともややこしい事に。

やってきたあちらの秘封倶楽部ふたりも、私達を見て驚きの声を上げていた。

▼ 2007/10/28 21:48 先斗町通三条下ル無花果町 バー・オールドアダム?

それから一時間あまりが過ぎて。

オールドアダムには、実に理解しがたい光景が広がっていた。

「これは……なんとも」

秘封倶楽部は曲がりなりにもオカルトサークルである。それも結界の隙間を探し境界を暴く、非合法な活動も辞さない不良サークルだ。これまでだつてそれなりに成果を上げ、人には言えない不思議な体験をしてきた。蓮台野に咲く満開の夜桜、異世界の竹林を彷徨い遭遇した炎の化け物。L4ラグランジュポイントに眠る、原始の緑に覆われたトリフネ遺跡。

けれど。

馴染みになったバーに、自分達とそっくりな二人組が次々と、山のように押し掛けて、無数の秘封倶楽部と顔を突き合わせるなんて体験、流石に想定外も想定外。いくらなんでも非日常が過ぎるという話であつた。

「壮観ねえ」

頭を抱える私の隣で、なんとも能天気な感想を漏らすメリー。

[illegible]

ざっと見渡す視界の中にだけでも、同じ顔がそれぞれ数百。それぞれが連れ立つ相手と顔を突き合わせ、周りを見回しながら様子をうかがい、囁き交わしている。きっとその総数は百万よりもなお多い。

「いつの間にこんなに増えたのかしら、私達」

「……課題をやった間なのは確かね」

もしかして旧型酒の悪酔いだろうか、空っぽのフオビドウンサイダーの瓶を覗きこんでみたりもしたが、キラキラ輝くガラスの向こうには、やっぱり見知った顔、顔、顔。

ほとりとほつぺに落ちてきた冷たい雫を拭って吐息する。

「私達の他にも、こんなに秘封倶楽部って居たのね。下手したら京都の人口より多そうよ」

「なんとも穏やかじゃないわね……」

この京都に限っても、オカルトサークルなんてごまんとある。公式に届け出ている団体はその名前を調べる方法だつてあるけれど、私達のような不良オカルトサークルともなれば、その活動はアンダーグラウンドなものだ。

「でも蓮子？ 数が多いってことは、それだけ偶然被るってこともあると思うんだけど」

「それは否定しないけど、そっくりさんが居ていい理由にはならないと思うの」

「もっともな話ね」

ぐるりと店内を見回す。顔が映るくらいぴかぴかに良く磨き込まれたテーブル、歴史とアルコールと煙草が染みついたカウンター、萎れかけたままの観葉植物、演出なのかマスターのズボラなのか色褪せたメニュー、音の飛びがちな骨董品のジュークボックス。

内装の一つ一つはどれも見覚えのあるオールドアダムの調度だが、じつと眺めていくとそのフロアがいつの間にか、数キロ先まで続いているのだ。

見慣れた光景ばかりで構成された知らない場所という奇妙な視界に、頭がくらくらする。

メリーに確認したところ、ここはもう境界をくぐり抜けた先だという。しかしいつ境界を抜けたのかは、メリーにも覚えがないらしかった。一番怪しいのは入り口のドアだが、そもそも冷静に考えて、オールドアダムはこんなに大勢が詰めかけられるような店ではないのだ。

7 オールドアダムパラドックス

「ともあれ、こうして呆けてたって始まらないわね」

まずは行動。私は席を立て、手近な人影に声をかけた。と言ってもこの部屋の中に存在するのはメリーか蓮子の2種類ののみであり、私の相方たるメリーはこうしてすぐ側にいるわけで、そちらを選ぶのはなんとなく憚られた。

必然的に、呼び止められたのはもう一人の私……宇佐見蓮子となる。

「ねえ、貴方」

「なに？」

振り向き、帽子の下から物怖じせず真っ直ぐにこちらを見つめる瞳。何の変哲もない黒い目は、けれど強い意志を宿し、じっと見ているとまるで吸い込まれてしまいそうな錯覚を覚える。毎日鏡の向こうによく見る美少女であるが、こうやって鏡像じゃない自分が動いて喋るってのはなんともすごい違和感だ。

「あなたの名前、聞いてもいいかしら」

「……もうこれで17回目よ」

うんざりとした顔で、向こうの私——蓮子βはこめかみをつつき、

「私は宇佐見蓮子。専攻は超統一物理学。オカルトサークル秘封倶楽部のメンバーよ。こっちは相棒のメリー。よろしくね」

「奇遇ねえ。良く似た名前を知ってるわ」

「でしょうね」

さすが私、既に状況はしつかり把握済みのようだ。

髪長さとか、着ている服とか。よく見ればそれぞれに小さな差はあるけれど、基本的にとっても良く似た私だった。蓮子βは、ついとこちらの隣へと視線を向け、胡乱げに目を細める。

「で、そちらがあなたの相棒？」

「ええ。またまた奇遇ね。あなたと同じく、私の相棒もメリーなのよ。宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーン。ご存知の通り秘封倶楽部よ」

「はじめまして……でいいのかしら？」

「はじめまして、でいいんじゃないかしら」

小首を傾げた後、そっと自己紹介をするメリーとメリーβ。なんとも暢気な様子で親交を深めている二人を尻目に、蓮子βは吐息をひとつ挟み、私のテーブルへと腰を下ろす。

「あなたも私なんだから、だいたいことは予想できてると思うけど。一応分かっていることを教えておくわ。ここはおそらく、境界の向こうに作られた、もうひとつの旧約酒場^{オールドアダム}。広さはおおよそ無限大。……少なくとも、私達の誰も部屋の端っこを見つけられてないわ。マスターもいないし他のお客さんもない。当然ながら他の出口もない。ドアも窓も開かないわ。脱出手

段は今のところ皆目見当つかず」

「これはどうもご親切に。感謝するわ、私」

「あなたも私なんだから、そのうち同じことを考えるし同じことに気付くのよ。ここで意地悪したところで一緒なもの」

なるほど。私が考えるような事は、他の私達も考え付いているということか。早速意気投合した様子のメリーさんとメリーβを眺めつつ、私は唇に指を触れさせた。

「ねえ、蓮子β」

「私から見ればあなたがβなんだけど」

なるほど。ここで『βって何よう』みたいな事を言い出さないところ、本当に私なんだなあ。

「……まあそこは主観で許してちょうだい。一つ確認したいんだけど。ここに集められてるのは秘封倶楽部だけってことでいいのよね？」

返事は目の前からではなく、隣からやってきた。

「ああ。その通りだよ」

「うげ」

思わず揃ってそちらに眼を向け、私達が一斉に唸ってしまったのは、決して大袈裟な反応ではなかったはずだ。

▼ 2067/10/28 21:57 ♪♪♪♪♪♪♪♪ ♪♪♪♪♪♪♪♪ バー・オールドアダム♪

自分そっくりの顔をした異性。そいつを前にした瞬間の実に筆舌に尽くしがたい感覚を、ぜひご想像いただきたい。自分じゃない自分が親しげにそこに存在してるという光景は、悪夢といふかなんというか。二人揃って顔をしかめた私達に、そいつもまた実に微妙な表情をしながら答えた。

「そんな顔をされるとこっちも困るんだよな。僕だって同じ気分なんだから。そっちの僕の想像の通り、ここは多分、秘封倶楽部の可能性が集められている場所だよ」

宇佐美蓮司なんだかと名乗った（だが断じて蓮子と呼ぶ）彼は、私が口にしようにしたことを先回りして説明した。頭の中を読まれてるみたいで気持ち悪いけど、これは向こうの私に読心能力があるわけじゃなく、やはりこんな外見でも私だから私と同じことを思いついているということなのだろう。

「大分、差異はあるみたいだけどね」

紹介するよと彼が呼び寄せるのは、やはりというかなんというか金髪的美青年のメリーだった。スラックスにブラウスの姿が、彼の世界の秘封倶楽部なのだろう。妙に距離が近いという

か、顔と顔が近いのが気になる。……が、突っ込むのはやめておいた。

「……わりとかっこいいわね」

「ちよっと、メリー？」

どうにも、メリーは他のメリーに対してやけに評価が高いというか警戒のハードルが高い気がする。同じ自分だからってそうも簡単に信用していいものか……というところまで思い至り、「そこを真面目に悩むと自己評価の問題に入り込むから、あまり真剣に考えない方がいいわ」

「……ご忠告どうも」

蓮子βからの言葉に頭を抱える。やりにくいなあもう。

改めて辺りを見回してみれば、ここに集まった私達は、皆それぞれに少しずつ違っていた。それは外見であったり、言動であったり、服装であったり、時に性別であったり年齢であったりと様々だったが、観察する限りその姿に全く同じものは見当たらなかった。

それでいて、宇佐見蓮子は宇佐見蓮子、マエリベリー・ハーンはマエリベリー・ハーンだとすぐに分かるのだ。そう思って視線を巡らせれば、

「えい」

「きやあ!？」

「ちよっと、なにしてるの蓮子!？」

「いやあその。あっちのメリーさんがあまり見事だったもんでつい」

向こうの大テーブル、メリーσの大きなおっぱいに手を伸ばしてメリーδに怒られている蓮子δ。一緒になって怒る蓮子σもそれに加わり、まったくもって騒がしい。

「メリー、もうやだー、帰るー!」

「ほらほら、へソ曲げないの。こんなの滅多にない不思議体験じゃない」

「やだー! かえるのー!」

「もう、蓮子ったらわがままねえ。私が一緒でも嫌?」

メリーεの膝の上に抱えられ、ぐずる黒髪幼女こと蓮子ε。舌ったらずな甘い声の抗議を、どこ吹き風とあやすメリーεの表情はいまにも溶け落ちそうなアイスクリームみたいだ。

おでこをぐりぐりと寄せ合うメリーεに、蓮子εはむうと膨れながら、小さく首を横に振った。満面の笑顔のメリーεがばしゃばしゃと携帯のフラッシュを焚く。

「……いくらなんでもあれ、犯罪じゃないかしら」

「そもそも幼女をバーに連れてくるのが問題な気がするわ」

「そうかしら。可愛いじゃない? ねえ」

「ええ。蓮子もあれくらい素直だといいのにねえ」

眉をひそめる蓮子一同の統一見解に対し、メリーさん一同はこれに強く異議を唱える。しか

し蓮子は断固としてメリーの意見には反対である。

「でも蓮子？ ああいうのもあるみたいだけど？」

メリーに袖を引かれてみれば、今の秘封倶楽部と反対に、ふわふわの金髪をなびかせるおしゃまなメリーを微笑ましげに見つめている蓮子の姿もある。

……まあそうなるわね。妙に納得して、私達は大人しく抗議を引っ込めた。

「賑やかなえ。同じ自分でも結構違うのかしら」

そうしてやいのやいのと言いつけているうちに、近付いてきたのはまたもや新たな蓮子、蓮子と。そつと相棒の手を握る彼女は、メリーと揃いの指輪を薬指に嵌めている。

……つまりまあ、そういうことだ。うん。

「……ええと」

「どうしよう蓮子、私達もキスしたほうがいいのかしら？」

錯乱したのか訳の分からない事を言い始めるメリー。いやそういうんじゃないからこれ！

ああ、私達にはこういう可能性だってあるのか。するともしかして、こうやってそれを見せつけることが、この異変を起こした誰かの目的ということなのかかもしれない。

「ああ、懐かしいわねえ。最近すっかりこんな事も無くなっちゃったから」

「そうね。昔は随分無茶をしたものねえ」

「久々の同窓会に、誰かが気を利かせてくれたのかしらね」

その向こうでは穏やかにテーブルを囲み、思ひ出話に花を咲かせる蓮子 θ とメリー θ 。こっちはどちらも素敵なおばさまといった気配で、そのやりとりはなんだかちよつとうらやましい。

「うちの子たちにも見習ってほしいわねえ」

「そうねえ、お互いインドア趣味で苦労するわね」

ざつと30年くらい未来の私達だろうか？ あれが私達の未来かというとまた少し話は違ふんだろうけど。

「まあ、おおむね分かったわ。ここにいるのは私達の並行世界。可能性問題なのね」

無数の並行世界の秘封倶楽部のバリエーション。そのどれもが、秘封倶楽部の可能性ということだ。その中の共通項は、多分――

「日付無きバー・オールドアダム。時間の流れが意味をもたない世界。つまり、この旧約酒場が存在する世界線の秘封倶楽部が境界の中に重なり合わさってこんな状態が発生しているってことだね？」

「冴えてるわね。さすが私」

あまり同意したくない蓮子 γ に、さらりと同意する蓮子 β 。まあ彼の言っている事は確かに正しくて、ここに集められた私達は、この状況に困惑はしていても、この場所に困惑はしてい

ない。それはつまり、この場の私達は全て、オールドアダムを知っているということだ。逆説的に、ここに集まった秘封倶楽部は、あらゆる可能性の中のほんの一部。

バー・オールドアダムの事なんか知りもしないで活動している私達は、ここに来る事はないのだろう。

「でも、偶然でこんなことが起こるものかしら？」

メリーがメリーδ（おっぱい大きい）と一緒に聞いてくる。ううむ。改めて見ても半端ないなメリーδ（おっぱい大きい）の可能性。……ところで、これだけ数のある私の可能性世界の中に、たわわな宇佐見蓮子ちゃんの可能性が見当たらない件についてももう少し詳しく。

閑話休題。

「要するに、誰かが意図的にこの状況を引き起こしてること？」

「そうじゃないと腑に落ちないことがあるわね。参考までに聞くけど、あなた達、これまでサークル活動でどんなことをしてきたの？」

「……？ 虹の根元に埋まってる宝物を探しに行ったり、満月の夜にだけ現れる池の主を釣りに行ったり。あと、一年中咲いてる桜を探しに富士山に登ったりしたわね」

彼女たちの語る活動は、私達の記憶にあるものとは大きく違うものだった。試しに、蓮子βと手分けして他の秘封倶楽部たちに同じことを訊ねてみるが、その活動内容はどれもこれも千

差万別。ジグソーパズルの迷宮に潜って、ぬり絵の王国のお姫様になったメリーεと蓮子ε、海に向こうの狸の島を探し、十番化け勝負に挑んだ蓮子δにメリーδ。もう引退して長いという蓮子θとメリーθも、若いころはエリア51のメンインブラックから逃げて宇宙人の乗り物を見つけたりと、ワイルドな冒険をしていたという。

そんな、千差万別の冒険を経験した百万通りの秘封倶楽部は、しかしこの旧約酒場という一つのキーワードで交錯している。あるいは、それを綴るDr. レイテンシーの名で。

「……成程ね。全くの偶然って可能性は捨てきれないけど。今の私達の交錯の原因になったのがここなんじゃないかしら」

オールドアダムの内装を示す私に応えたのはまた別の声。右の顔を半分を隠すように髪を伸ばした、蓮子ι。

「私達までここに呼ばれたってことは、その可能性が高そうね。こんな格好になっても、頑張って生き延びた甲斐があったわ。……ねえメリー？」

そう言って蓮子ιは、機械音のする義手でそっと髪の毛を持ち上げる。露わになった右半分の火傷の奥、開いた瞼の奥あるのは――青にも、赤にも黄金色にも見える、私の、私達の良く知っている、境界を知る瞳。

自分の目元、自分のものとは違う瞳をそっと、慈しむように撫でて、彼女は微笑む。

「二人で一つの秘封倶楽部、か。なんだか私が言うのと凄い皮肉ねえ。私達はもう離れられないけど——こんなにも沢山の私達が、秘封倶楽部を続けているのは、やっぱり素直に嬉しいわね」
なんともハードな背景を思わせる彼女達だが、それでもその目は新しい不思議と冒険に心を躍らせている。

「蓮子は、やっぱり蓮子なのねえ」

メリーが感心したようにつぶやく。なんだか他人事みたいだが、私としてはちょっと複雑な気分だ。いや、志は素敵なんだけどなんかずいぶん重くないか蓮子。大丈夫？ あの世界、メリーも実質死んでるみたいな事言われてるのに流しちゃって平気？

……でも、そうか、違うのか。実のところ、他の皆とは違って一人だけでいる彼女の事は、内心かなり疑っていた。予想が外れて嬉しいような、ほっとしたような。やっぱりこの中に犯人がいるというのは、一番ありそうな可能性でもあまり考えたくない。

その時。私のすぐ隣で、蓮子^いがポンと手を叩く。

「……ああ。そっか。分かったよ。これを起こしたのが誰なのか」

「ちよ、ちよっと、本当？」

顔を顰める私を余所に、一斉に周囲の私達が振り向いた。

「この場の私達が一つの共通項で結ばれてるなら、その中で例外を探せばいい。つまり、相棒のいない秘封倶楽部だ」

皆の注目の中、指を立てて説明する蓮子 γ 。その場の全員が一斉に振り返る。その視線の先には――相棒たるメリーを連れていない、片目の少女。蓮子 ι 。

いや、違う。彼女はちゃんと、唯一無二の相棒であるメリーを連れている。

「ええ。違うわ、彼女は秘封倶楽部よ」

言葉を引き継いだのは蓮子 β だ。彼女もまた、この異変の原因に気付いているようだった。

「じゃあ、それは一体誰なの？」

「……あなたよ」

「え」

あろうことか。私に向けられた指先に、思わず言葉を失う。

「あなただけが、この場で唯一、秘封倶楽部じゃないわ」

ちよつと待て。なんだその断言は。思わず救いを求めた視線が、メリーを探す。けれど。

それを遮るように、蓮子 γ が割って入った。

「だって、君はさっき彼女の事をなんて呼んだ？」

「？ 何のこと？ そんな根拠もなしに、勝手に人を偽者扱いして——」

小さく首を振って。蓮子 β は、一言一言を、区切るように口にする。

「私と会った時、あなたはなんて自己紹介したか覚えてる？」

ねえ。宇佐見蓮子は、どうして相棒の事を、『メリー』と呼ぶのだったかしら？

どよめきが起こる。ざわざわと波打つオールドアダムの店内に、良く通る彼女の声が響いた。

「ここにいる宇佐見蓮子なら分かっていることよ。あなたには、その理由がわかる？」

「ちよ、ちょっと待って。そんな、そんな事が理由に——っ」

抗弁しようと、声を上げて。けれど。でも、私の伸ばした手の先で。

メリーは、マエリベリー・ハーンは。他の誰でもない、 β でも γ でもない、私の知る唯一無二のメリーは、そっと目を閉じて静かに首を振った。

いや、違う。この場に置いて、私が『宇佐見蓮子』で無いのならば。その相棒であった彼女もまた、秘封倶楽部ではあり得ない。

「みんなを集めたのは、あなたね」

メリーに向かい、蓮子β……いや、本物の宇佐見蓮子の一人が、静かに歩み寄る。その目には月と星を、時間と場所を映して。この曖昧な世界のオールドアダムに、はつきりと自分だけの真実を捉えて。

メリーであつたものに、対峙する。

突然に、脳裏に閃くものがあつた。そうか、そうだ。彼女は、彼女の名前は――

「御免なさいね。あなた達を惑わすつもりはなかったの。……ただ、少し。ほんの少しだけ、寂しかっただけ」

「……私達はどうでもいいわ。こんな不思議は、いつもの事だもの。でも」

宇佐見蓮子が、私を示す。秘封倶楽部である事を失つて、ただの抜け殻になった私を。

「それに付き合わされた彼女の気持ちも、考えてあげて欲しかったわ」

静かに。言葉なく頷いたメリーの顔を、ふわりと傘が覆い隠した。いつしか紫のドレスが波打つように広がり、辺りには無数の亀裂が走り始める。ぱきぱきと広がり始めた境界、隙間の中に、いくつもの秘封倶楽部達が飲み込まれていく。

メリーの表情は、傘の下に隠れて窺い知れない。

(そうか……)

薄れてゆく意識の中で私は思う。ここは可能性の集積場。あり得た可能性。それはつまり、
とんでもなく低い確率でも、ありうる秘封倶楽部の姿ならば、間違はなく存在するのだ。

けれど。その中で秘封倶楽部たりえない彼女は。

偽物の私を、相棒にした彼女は。

どんなに願ひ叫んでも、焦がれるほど希う、秘封倶楽部にはなれないのだ。

(馬鹿だ、私……)

視界の端に、空になったフォビドゥンサイダーの瓶が映る。禁断の果実を口にして、私はそれを知ってしまった。彼女の名前を知ってしまった。もしかしたら、この矛盾だらけのオールドアダムでは、口にさえ出さなければその原因すら確定しないものかもしれないのに。

あの時間の無い旧約酒場の中でなら、私と彼女は、ずっと秘封倶楽部のままでいられたかもしれないのに！

匣を開けなければ、シュレディングアの化猫はいつまでも元氣だ。

……でも。

やがて。ふわりと浮いた傘の向こうに、一瞬だけ、彼女の横顔が見えて——
そうして、ぐるりと視界が廻る。

▼ 2017/10/28 21:15 先斗町通三条下ル無花果町 バー・オールドアダム

気付けば喧騒が戻ってきていた。カウンターの奥でグラスを磨くマスター、顔を突き合わせ
て論じるおじさん達、古い英字新聞を眺める老紳士、次のオカルト探検を計画する男女グルー
プ。それぞれが思い思いに、不健康な旧型酒を酌み交わし、性質の悪い酔いに身を委ねる
雑多で、古くて、どこか薄汚れた、いつものオールドアダムの風景だった。

テーブルの上には空になったフォビドゥンサイダーの瓶が1ダース。

「……あえ」

気付けば呂律も怪しく、視界がぐらぐらと揺れる。いつの間にこんなに飲んだのだろうと思
考を巡らせるが、禁忌の旧型アルコールは大脳皮質の隅々まで浸透して、人類の理性はあえな
くその前に敗北を喫する。

「……………」

すぐ目の前では、テーブルに突っ伏してすやすやと寝息を立てるメリーさん。そのやわらか
そうなほっぺに指を触れさせると、むにや、と眠たげに顔を上げる。

「？ なに、蓮子……」

「メリー？」

がばとテーブルの上に身を乗り出し、メリーと臉が触れそうな距離まで顔を近づけて。

念入りに、慎重に、酔いの回った頭でじいっとその顔を覗きこんだ。上から下まで、何度も何度も、じっくり繰り返し。数十秒。

なぜだか（アルコールのせいかな）真っ赤になっている彼女が、どこからどう見ても、私の良く知るメリーであることを確認して、一安心。

そっと額の汗を拭う。

「……よかった。ちゃんとメリーだ」

「なにがよっ」

失礼ね、と怒るメリーに。あははと笑って。

私は新しく注文したフオビドウンサイダーを開け、メリーの手握らせたもう一本にカキンと触れさせる。冷えた炭酸がしゅわしゅわと弾け、知恵の実の夢はまどろむ酔いの泡の中に消えていった。

【奥付】

「オールドアダムパラドックスγ」

平成二十八年十月三十日 科学世紀のカフェテラス6

発行 折葉坂三番地 (<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 銅折葉

印刷所 八雲出版



※本作は「上海アリス幻樂団」様の「東方Project」の二次創作です。
作中に登場するいかなる人物、組織も実在のものとは関係ありません。